

うずまき

耕治人

うずまき 耕治人

河出書房新社

うずまき

昭和五十年十月二十五日初版印刷

昭和五十年十月三十日初版発行

著者 耕治人

発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座（東京）一〇八〇二 電話（〇三）二九二一三七一一

印刷 中央精版

製本 岸田製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

この世に招かれてきた客	5
粘土の上を風が吹く	43
蟻地獄	81
髪床屋	119
頭の中の川	155
うすまき	189
あとがき	229

作品集
うずまき

この世に招かれてきた客

千家元麿は貧しかったが、それは生活能力が乏しかったためでない。単なる無欲のためでもない。原因はもっと深いところにあるような気がした。

もし千家元麿が金や株券や土地など持っていたらどうなったか。

彼は生きていたあいだたくさん詩を作り、それが十何冊かの詩集になった。今日それらのものを読むことが出来るが、金があったら違ったものになったのではないか。

私がそんなことを考えたのは、R綜合病院の、ベッドの上だった。

突然そんな考えが浮んだわけでない。何日も彼のことを考えているうち、そんな気持ちになったのだ。

そんなわけでその日のことは忘れない。それは昭和四十二年三月はじめのことだった。日付を覚えてるのは病室（個室だった）の、白い壁にかけてあった新聞紙位の、大きさのカレンダー

を見ているうちその考えが浮んだからだ。そのカレンダーは、私の家にあったもので、私が、家内に言って、持ってきて貰ったのであった。

私はそれまで千家を、無欲な人、金銭に恬淡な人、いくらかダラシない人、というふうに考えていたのだ。

詩壇でもそんなふうに受取られていたようだ。それで知らないうちにその影響を受けたかもしれないが、長いあいだ千家に接し、千家の生活を見てきて、その考えを訂正しなければならない、と思ったことはなかったのだ。

千家元暦は昭和二十三年三月に死んだから、死後十九年間も彼に対する私の考えは、変らなかつたわけだ。

十九年のあいだにその観点から、私は、彼についていくつかの文章をかき、小説もかいた。

私はそのことに責任を感じたのだ。自分の至らなさを詫びたくなったのだ。

私は新しい立場から、千家元暦のことを書かねばならないと思った。

そのためには彼が書き残したものを、読み直す必要があった。

私がR総合病院に入院したのは一月半ばで、退院したのは三月の末（四十二年）だった。

病院の方では退院はまだ早い、といったが、私の方にいろいろ事情があつて、外来患者として、通うということで、許して貰ったのであった。

そんなわけで自宅から週三回、その病院へ通ったが、体力が恢復していないから、病院から帰

ると、家内が敷いておいた寢床に、すぐ横になるような有様で、読書どころでなかった。

しかしそのあいだも頭から、千家のことは離れなかった。

千家が書き残したものを読みはじめたのは、その翌々月のことだ。

私は彼が生前出した著書を五、六冊持っている。それは彼のすべての著書の、半分にもならないが、幸いなことに二年前（四十年）彼の全集が刊行された。上巻五〇六頁、下巻五二六頁、二巻ではあるが、A5判、二段組の、分厚いものだ。

その全集が出てから、それまで本棚に並べていた彼の著書は、押入にしまいこんだ。本棚は一つしかないので、並べ切れなかったのだ。

私が外来患者として、R綜合病院に通ったのは八月の末までで、病院ではもう体力も恢復したし、自分の仕事に戻っても大丈夫だから、来る必要はないといったのだ。

その頃は全集はみな読み終っていた。メモも相当取った。

しかし肝心の、千家元暦の貧しさの本質を、どう説明してよいか全然見当がつかなかった。

彼を単なる無欲の人でないとするなら、それがどんな理由によるのかはつきりさせねばならぬが、彼の全集を読み返してみてもその手がかりは得られなかったのだ。

全集のなかで特に私が親近感を持った詩があった。

全集上巻に収められた松沢病院で作った十篇の詩である。

それらの詩を読んだとき、従来と違った氣持を持ったのは、彼に対する私の考えが変ったため

だが、ほかにも理由がある。それは私が松沢病院に入れられるかもしれないなかった、という事だ。

R綜合病院に入って、意識を取戻してからもかなり長いあいだ不眠で苦しみ、ベルを押して看護婦をよび、訴えることはしばしばだった。そんなとき看護婦はなだめにかかった。それで気持ちが落ち着くこともあったが、たいていは時間が経ってもう一度ベルを押した。看護婦はブツブツ言いながら、注射をしたのであった。

しかし二月も半ばを過ぎた頃はもうそんなこともなくなった。

家内は私の病気の経過は医者から聞いて知っていた。はじめの頃家内は毎日のように病院にやってくるが、その時分は二日に一度、三日に一度という具合だった。

そんな或る日家内は、洗濯した私の下着類を、壁際の棚に置いてから、

「よく睡眠薬をやめたってお医者さんがいってましたわ。お風呂も近いうちはいれるんですって」

と言った。私は入院してから一度も風呂に入っていないかった。

「早く風呂に入りたい。頭はカユイし、体はムズムズして気持ちが悪い」

「いまだからお話するけど、あなたは松沢病院に入れられそうになったのよ」

私はギクツとして家内の顔を見た。家内は頬笑んでいた。私が意識を取戻したのは、入院して二週間ばかり経ってからだった。私の場合意識を取戻すということは自分の過去を思い出すという事だった。毎日少しずつ思い出していった。衰弱しているから、すぐ疲れて、頭も眼もぼん

やりなってしまうのだ。

いろんなことを思い出したが、千家元暦のことも当然思い出した。他の思い出と共に彼のこと
が少しずつ浮んだ。思い出さない日もあったが、彼が松沢病院にいたことを思い出したのはその
二、三日前だったのだ。

千家は松沢病院に入ったが、私はそことは無関係だ。世の中には、松沢病院に入る人が何人も
いるが、私は関係ない、その時そんなことも思っただけであった。

だから、家内から、そこへ入れられたかもしれない、と言われたとき、なんとも知れない哀し
い気がした。

家内はおだやかな、低い声で話したが、私は、R総合病院に入院するまで、T医師（開業医）
にかかっていた。薬屋から買った睡眠薬を、長いあいだ飲みつづけ、心臓が悪くなった。T医師
にかかったのはそのためだった。

T医師は心臓の薬だけよこした。私は睡眠薬を下さい、と言ったが、T医師はそれを服用した
ら、どんなことになるかくどと話した。私はそんなT医師が苦手で、睡眠薬は、町の薬屋さん
から買った。しかし心臓の調子がおかしくなると、T医師のところへいった。そんなことを繰返
したのであった。

私は自分の症状が分らなかったのだ。その症状というのは正確には三十四年から毎日のように
飲んだ睡眠薬のため神経を犯されたのであった。

それから八年経って（四十二年一月はじめ）意識を失い、倒れた。私がT医師にかかるようになったのは、その二年ばかり前で、すでに私の頭はおかしくなっていたのだ。

家内はT医師のところへ駆けつけた。ところが私の症状を察知していたT医師は、家内が、自宅で私を看護することは不可能なこと、私の症状は、松沢病院に入れるよりほかないことなどを説き、自分の方で手続きをするから、と言ったのであった。

家内は止むを得ないと思い、承知した。そしてそのことを、家内が古くから知っている人（女性）に知らせた。家内は報告のつもりで、その人に電話したのであった。

その人に、私のようなものは、松沢病院に入れたら、本物の気違いになるかもしれない、総合病院の方がいいのではないかと忠告され、家内はその忠告に従い、奔走し、ようやくR総合病院に入ることが出来たのであった。

意識を失ってからのことは全然分らないが、それ以前のことも葉のため朦朧もろうろうとしていて、知っているようでもあり、知らないようでもあった。

家内の話を聞いていたあいだに、私は、千家元暦同様、松沢病院に入るところだったのだ、自分に縁がないと思った松沢病院だったのに、と思い、千家が急に身近くなったのであった。しかし口には出さなかった。

家内は、そんな話をしたあとで、

「だけどあたし心配していなかったの。千家先生が松沢病院にいらっしゃったことは聞いていま

したし、お直りになったことも聞いていましたから、あなたも必ず直ると思ひましたわ」

と言った。

私は家内がそんなことを考えたのかと思ひ、礼を言いたくなつた。

私をはじめて千家元暦を訪ねたのは、大正の末だった。郷里熊本の旧制中学を卒業し、東京へ出てきてから、暫くしてからだった。

それから時々訪ねるようになったが、千家が松沢病院を退院して何年か経ち、千家を中心に詩の同人誌をやることになった。そのとき私は事務を受持った。その頃私は結婚していたが、家内にも手伝つて貰ひ、私に代つて千家のところへ行つたことがあつた。

千家が松沢病院にいたことを、家内に話したのはその頃ではなかつたかと思う。

私は否定的な言い方をしたのであつた。千家の貧乏が、ときにはダラシなさと同じように映ることがあつたから、「なにしろ松沢病院にいたことがあるから」というような言い方をしたのであつた。

こんなふうに書くとき千家が松沢病院にいたあいだ見舞に行つたように受取れるかもしれないが、見舞つたことは一度もない。入院を知つたのも相当経つてからだった。

その時分千家は豊島区长崎の平屋に住んでいたが、或る日訪ねたら、門が閉つていた。そんなことが二、三度続いてから、千家の周りの人から、千家が松沢病院に入つたことを聞いたのであつた。

どういふわけか松沢病院に関する限り秘密主義で、見舞った人はないようだった。

退院してから、夫人の実家がある飯能の方で静養していたようだが、東京へ戻ると、入院前住んでいた平屋の近くに、二階家を借りた。そこから私はハガキを貰ったのであった。

訪ねたが、そのときも、その後彼中心の同人誌の事務を受持ったときも、彼の口から、松沢病院の名が出たことは一度もなかった。死ぬまでそうだった。

R総合病院で、私がいた病棟は、神経科で、私を担当した医者は、脳外科専門ということだった。

千家が松沢病院に入った原因はなんだろう？

私の場合はっきりしている。私は睡眠薬のため神経を犯され、心臓を損^きねたのだが、好き^す好^{この}んで飲んだわけでない。私が受けた打撃を忘れたいため、又その打撃から生じた不眠のためだった。はじめは絶望や憎^さ悪^いに苛^{さい}まれたが、常用していると、そんなものは霞んでしまった。

睡眠薬を常用すると、どんな恐ろしいことになるか知っていたから、止めねばならぬと何度も思った。しかしそんな気持もそのうち麻痺してしまった。

私が、T医師に、睡眠薬を飲まずにいられない自分の立場を話すことが出来たら、私はもしかしたら、その段階で救われたかもしれないが、それを話したため、私はもっとひどい目に会うかもしれない。それに話しても分って貰えるとは思えなかった。人には言い難いことだったの